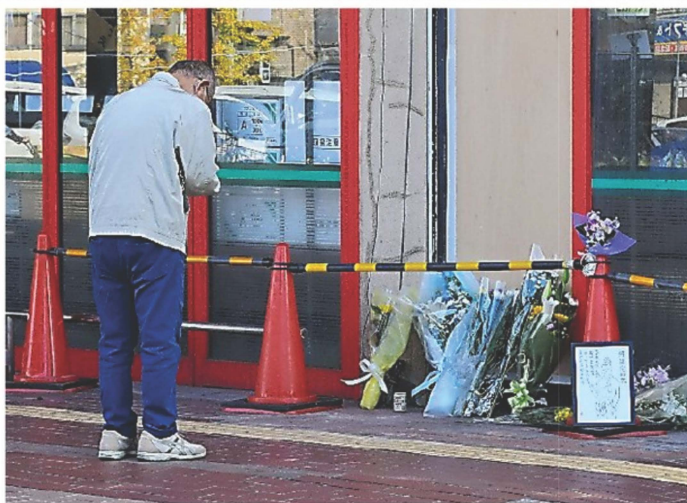




花が手向けられた事故現場で手を合わせる男性
＝19日、大阪府大阪狭山市、井上正一郎撮影

高齢運転者 悩む「やめどき」

相次ぐ死亡事故 大阪で3人死傷

高齢者が運転する車の事故が相次いでいる。大阪府大阪狭山市では今月17日、89歳の男の車が暴走し、1人が死亡、2人が重傷を負った。高齢者が運転免許を自主返納する動きは広がっているものの、悲惨な事故は後を絶たない。社会全体で安全性を高めていくにはどうすればいいか。

通院・買い物：不便との戦い

「本当にお気の毒に」。事故が起きた大阪狭山市のスーパ一敷地。事故2日後の19日、市内の男性(80)は手を合わせた。

「事故が起きるたびに運転免許の返納を考える」と話す。17日はちょうど、更新に必要な高齢者講習を受けていた。

ただ、周辺は坂が多い。「通院や買い物考えると難しい」

別の男性(89)は9年前に免許を返納した。物損事故を起こしたからだ。

不便なのは確かだ。10分余り歩くことや階段の上り下りが「これほどひどいとは」。それでも「事故を起こしてからでは遅い」。暴走した車を運転していた男は自動車運転死傷処罰

法違反容疑で府警に逮捕され、送検後に釈放された。府警に対し、妻(90)の買い物に付き添っており、「ブレーキとアクセルを踏み間違えた」と話したという。友人は「奥さんを病院にも送迎していた。『事故を起こす前に運転をやめないと』と話していたが」。

一方、死亡した岡田博行さん(87)の親族によると、岡田さんは車の免許を返納し、免許返納制度を利用する

自主返納には限界 定期検査を

高齢者の運転リスクをどう考えたいのか。

公益財団法人・交通事故総合分析センターによると、高齢者9万人のデータを分析した結果、75歳以上

の人は1歳上がるごとに、事故で過失が大きい「第1当事者」になる確率が1.02倍高まる。

小菅英恵研究員は「事前に何歳ぐらいまで運転を続けるか、移動をどうしていくか、プランを考えることが重要」と指摘する。

蓮花一己・帝塚山大学長(交通心理学)は自主返納を促すだけでは限界がある

とみる。「自宅駐車場や普段通る道で事故を起こし始めた時が運転のやめどきだと言われるが、納得しても

高齢者も増加傾向にあり、20年は75歳以上の29万7452人が返納した。ただ、車を手放せない人も多い。警察庁が2015年に実施したアンケートでは、返納を考えたが継続した人の7割弱が「生活が不便」を理由に挙げた。

一方、昨年、75歳以上の運転者が起こした交通死亡事故は333件で全体の13.8%を占めた。近年は12.14%台で推移している。対策は強化されてきた。

道路交法改正に伴い、誕生日の160日前までの3年間に逆走や信号無視などの交通違反をした75歳以上の人に運転技能検査(実車試験)が来年から義務づけられる予定だ。

「それは簡単ではない」

蓮花さんは「定期的な技能検査を義務づけるシステムが理想的。『かかりつけ教習所』を決め、毎年同じコースでチェックを受けられれば衰えを自覚しやすい」と提案する。

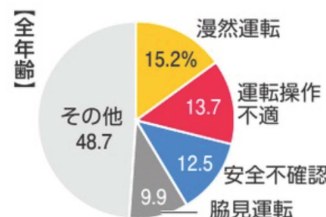
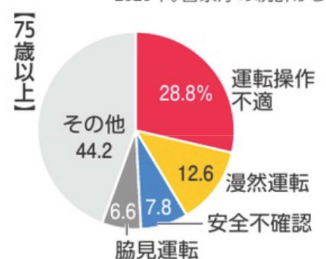
高齢者の事故原因で最も多いのが運転操作の誤りだ。ハード対策にも関心が集まる。

車の「誤発進防止システム2」を販売しているサン自動車工業(横浜)には大阪の事故後、問い合わせが相次いでいるという。

運転者のアクセルの踏み込み方を学習し、低速の状態から普段より強く踏まれたり踏み続けられたりすると、センサーでエンジンの吹き上がりを制御して加速を抑える。

(井上正一郎、古田寛也、染田屋電太)

運転者が起こした死亡事故の原因
2020年。警察庁の統計から



75歳以上の運転免許自主返納件数
警察庁の統計から

